



中里介山著

大菩薩峠

大菩薩峠刊行會

昭和二十七年八月十五日 印刷
昭和二十七年八月二十日 發行

(乱丁、落丁はお取替いたします)

大菩薩峠 (第十一卷)

定価三百八十円

送料 五〇円

著作権者 中里幸作

発行者 山田福太郎

東京都品川区南品川五ノ十三

印刷者 森高繁雄

東京都千代田区神田錦町三丁目十三番地

大菩薩峠刊行会

発行所 株式會社 彩光社

振替 東京一九三九七六番

富士高連印刷株式會社印行

大
菩
薩
峠

第
十
一
卷

目次

序

文

………

著者……五

畜生谷の巻

………九

勿來の巻

………一五

前卷までの梗概

………梁取三義……四一

題
字

裝
畫

口
繪

道
重
信
教

橫
山
大
觀

伊
東
深
水

編
纂
責
任

梁 寺
取 島
三 枉
義 史

序 文

大菩薩峠も今度、その第十一冊（畜生谷の巻、勿來の巻）を新たに出すことになった、まだく／＼決算といふわけではないが、ちよつとこの邊で見返り勘定をして見ると、稿を起したのが明治の末で、發表したのが大正の初め、世に現はれてから今日までは丁度廿年になる、これを現在の定本の頁にして見ると約六千頁、一頁かりに五百字と見ても三百萬字、世界の文學史上これより以上の長篇は無いことを確實に斷言し得るに至つた。

若しアメリカのやうな國で、こんなものを書き出したら、著者の人氣はリンドパークやフーズアーの比ではあるまいが、日本に生れたお蔭でこの點は比較的暢氣でゐられることの有難さを、ひとりしみじみと味ふ次第である。

だが、繰り返して見た日には、著者として慚愧汗顔の至りであることは申すまでも無いが、今や如何とも致し難い、阿房宮なら焼き拂へるが、文字は坑にするわけには行かない、たゞこれだけの山塊の間に、幾分か金石の響きある點を聞きわけていたゞけば往生する次第であるが、事實はいよくそれに遠い、曾てある會合の席に、某君歌うて曰く、

阿羅漢が菩薩の會に集りて、佛心なくも愍心は有る

いみじくも咏み出でたるものかなと、感歎の舌を捲いた事であつた。まことに我ながら、菩薩心、佛心はドコへやら、愍心滿々俗氣紛々——申し譯の無い次第である。

それはさうとして、この一冊には「畜生谷の巻」と「勿來の巻」とが納めてある。

それから、もう一つこゝにも念を押して置かねばならぬ事は、近來「大衆文藝」とか「大衆作家」といふものゝ中へ、故意にこの著者をも捲き込もうとしてゐるが、この著者には何が大衆で何が小數だか、ちつともわからない、斷じて、さういふ種類のものでないことを記して置く。

それと、もう一つ、劇や映畫にすることの謝絶辭退は、最初に宣言公約してある處と少しも變らないが、その後、帝劇で一度、歌舞伎座で一度、上場したことによつて、著者が變節軟化したやうに取られては大きに違ふ、あれはいはゞ上求菩提、下化衆生道の一奉仕といったやうなもので、演劇或ひは映畫本位に見せたものではないのである。今後も著者の信賴すべき各方面の宗教家か、或ひは著者自身の手によつて、何かの形式で演出する機會は絶無とはいへまいがその他の理由で握手妥協することとは出来ないやうになつてゐることを御承知願ひたい。

それから最後に御報告を申さねばならぬのは「大菩薩峠記念館」の事である。省線の立川驛から青梅鐵道といふのに乗り換へて、數驛を行くと羽村と稱する一寒驛がある。そこから數町の原中に二棟

の建物がある。そこが「大菩薩峠記念館」で、館内には小説大菩薩峠に關する有ゆる記念品と藏書數萬卷があり、一般の爲に公開されてゐる。たとへ御粗末ながらも、日本に於てのみか、世界に於ても、一つの小説の爲に一つの記念館が存在するといふことは前古に例の無いことでせう。これこそ實に讀者諸君のお蔭様で出來たものである。道は新宿から二時間足らずの行程でありますから、一日の散策ついでに心ある方の御觀覽を願ひたいものでございます。

昭和六年秋

著者 著

附記

大菩薩峠記念館は、現在でも介山居士の實弟幸作氏が館主となり、保存されています。

昭和二十七年夏

編纂部

三十畜生谷の巻

一

今、お雪は、自分の身を、藍色をした夕暮の空の下、涯しを知らぬ大きな湖の傍で見出し、た。

はて、この處は——と右を見たり左を見たりしたが、ちよつとの思案にはのぼつて來ない光景であります。

白骨谷が急に陥没して、こんな大きな湖にならうとは思はれないし、木梨平の鐙小屋の下が無名沼が、一夜のうちに擴大して、こんな大きな池にならうとも考へられない。さうか知らん——いづぞや、白衣結束で、白馬の嶺きに登つて、お花畑に遊んだやうな覺えがある。あゝ、さうく、あの時に白馬の上で、盛んなる天地の堂々めぐりを見せられて歸ることを忘れたが、では、あれからいつの間に、白馬の裏山を越えて、こゝへ來てしまつたのかしら。

白馬の裏を越路の方へ出ると大きな沼や池がいくつもあると聞いたが、多分さうなんでせう、でなければ、越中の劍岳を目ざしてゐたもんだから、ついでに、あちらの方から飛驒方面に迷ひこんでしまつて、こゝへ來り著いたのか知らん。

重しを知らない大きな湖だと思つて、あきれてゐるその額の上を見ると、雪をかぶつた高い山嶽が、あちらこちらから、湖面をのぞいてゐるといふよりは、わたしの姿を見かけて何か呼びかけ

たがつてゐるやうにも見られます。

「やつぱり周圍は山でしたね、同じ處にゐるんぢやないか知ら」

この夕暮を、急に眞夏の日ざかりの午睡からさめたものゝやうに、お雪はなさかどわからないで、暫らく、ぼんやりとして立つてゐましたが、さて、自分の身はと顧みると髪はたばねて後ろへ垂らし、白羽二重の小袖を着て、笈摺をかけて、足は甲斐々々しく草鞋で結んでゐることに氣がつき、さうして白羽二重の小袖の襟には深山龍膽がさしてあることを、氣がつくと、あゝ、成るほど、間違ひはありません、白馬からの下り途に違ひはありません。たゞ四邊の光景が、こんな風に變つてしまつたのは、下り道を間違へたせゐでせう、それにしても、ちよつとも疲れてゐない自分の身を不思議だと思ひました。どうも、何だか、この白い小袖が、鶴の羽のやうにふはりと空中に浮いて、白馬の頂きから此處まで、自分の眼は眠つてゐる間に誰かど、からだをそつと持つて來て置いてくれたものゝやうにも思はれ、やつぱりすがすがしい心のうちに、何となく暖かな氣持で、お雪は岩の上に腰をかけて、涯しも知らぬ大きな湖の面の薄暗がりを、うつとりと眺めつくして、それ以上には、まだ何事をも思ひ浮べることも、思ひめぐらすこともしようとはしません。

その時鐘が一つ鳴りました。その鐘の音が、お雪のうつとりした心を、よびさますと、あたりの薄暗がりが氣になつて來ました時、湖の汀の一方から、タド／＼と人の歩んで來る姿を臆ろに認

めたお雪は、ちつとその方を一心に見つめてゐましたが、夕もやを破つて、その人影が漸く近づいた時、

「あ、彌兵衛さんだ、彌兵衛さんが来る」

とお雪が叫びました。

臃ろながら、それと見えるやうになつた人の姿は、背に何物かを背負うて、杖をついて、かる、さんのやうなものを穿いた一人の老人に紛れありません。

その老人は、湖畔をめぐつて、お雪の休んでゐる方へと、杖をつき立てゝやつて來ましたが、いよく程近い處まで來ると、お雪がまづ言葉をかけました。

「彌兵衛さんですか」

「はい、彌兵衛でござんすよ」

こちらが彌兵衛さんと呼び、あちらも彌兵衛さんと答へるのだからこれは彌兵衛さんに間違ひはありません。

一一

して見れば、お雪は、とうにこの彌兵衛さんを知つてゐて、彌兵衛さんも亦、お雪に頼まれるか何かしてゐた間柄とみなければなりません。

併しながら、由骨へ来て以來の、お雪の知り合には、曾て彌兵衛さんといふ人は一人も無いから、これは、この度の山道に臨時にやとつた山の案内者か強力てうりきか何がであらうと思はれます。

「わたしは彌兵衛さんだとばかり思つたら、やつぱり彌兵衛さんでしたわ」

「はい、その彌兵衛でございますよ」

といつて、至りついた老人は、お雪の前へ來ると、腰をのばして、反そりをうち、そこへ突立つてしまひました。

「まあ彌兵衛さん、どうしてこんな處へお出でなすつたの」

「はい、わたしはこゝからあんまり遠くない處に住んでゐるのでございますよ」

「さうですか、ちつとも知らなかつたわ」

「はい」

お雪は突立つてゐる彌兵衛老人の頭から爪つま先さきまで、今更のやうに極めて興味深く見上げたり、見下ろしたりしてゐました。

「ほんたうにそつくりよ」

「何でございます」

「彌兵衛さんに、そつくりよ」

「何をおつしやります」

どうも、ばつの合はない處があります。彌兵衛さんが、彌兵衛さんにそっくりだといふことは、別段、念を押すには及ばないことだらうと思はれるのに、お雪には、これは容易ならぬ興味の的であるやうです。

それにもかゝはらず老人は、極めて無表情に突立つて、背に負うたものを、さも重さうにしてゐました。

この空氣を見ると、お雪と彌兵衛さんとは全く他人です。會つて知り合ひになつてゐたのでもなければ、この際頼んだ人でもない、單に呼び名だけが暗合したやうなもので、その外には何等の共通した感情も理解も漂^{たよ}うては來ないらしい。

そこで、お雪は、極めて手持無沙汰に、それでも、充分なる興味の眼は彌兵衛老人から放すことではなく、無言に見詰めてゐますと、この老人は、さながらお雪に興味を以て見つめられてゐる爲に此處に現はれて來たものゝやうに、どこからでも存分に御覽下さいといはぬばかりに、何時までも凝^じつと立ちつくしてゐるのです。さうしてゐるうちに、彌兵衛さんの輪廓が、最もハツキリして來ました。

何の事だ——これは彌兵衛は彌兵衛だが、只の彌兵衛ではない、平家の侍大將、彌兵衛兵衛宗清ではないか。

お雪が、いつ見知つてゐた？ それは申すまでもなく、彌兵衛宗清は